



TITLE:

<書評>齋藤 剛著『<移動社会>のなかのイスラーム --モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』昭和堂、2018年、定価6,000円+税、330頁

AUTHOR(S):

土谷, 輪

---

CITATION:

土谷, 輪. <書評>齋藤 剛著『<移動社会>のなかのイスラーム --モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』昭和堂、2018年、定価6,000円+税、330頁. コンタクト・ゾーン 2019, 11(2019): 442-447

ISSUE DATE:

2019-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/243995>

RIGHT:

齋藤 剛著

# 『〈移動社会〉のなかのイスラーム ——モロッコのベルベル系商業民の生活と 信仰をめぐる人類学』

昭和堂、2018年、定価 6,000円＋税、330頁

土谷 輪

本書はベルベルと呼ばれる人々を対象とし、モロッコのシュルーフという地域を舞台に、当該地域もしくは出稼ぎ先の都市において構築された人間関係のネットワーク、商業的な実践と聖者信仰を主とする宗教実践、また聖者と呼ばれる人々といったテーマから描かれた民族誌である。

内容構成は、大きな枠組みとして序章において理論的視座が提示され、第1章から第4章までの前半がベルベル人の特徴とその人的ネットワークおよび商業活動の描写、第5章から第7章にかけては聖者信仰とその儀礼、宗教的实践、そして結論部となる終章へと続く。序章と終章を含む全9章の目次は以下の通りである。

序章	移動とイスラームへの視座
第1章	生活からの聖者信仰への視座
第2章	ベルベル人と民族的差異—アマズィグ運動と「境界的思考」
第3章	情報と人的ネットワークの結節点としての故郷
第4章	シュルーフの商いと社会関係構築の諸相
第5章	「大聖者」ベン・ヤアコーブの末裔とスース地方東部社会の紐帯
第6章	モロッコ南部山岳地帯における部族民と聖者祭・廟参詣
第7章	聖者信仰の本質化を超えて—フキーによる治療が意味するもの
終章	聖者信仰を広げる世界、聖者信仰が開く世界

まず、後に詳しく紹介する内容の先取りとはなるが、本書の内容に関わる用語として「祈願」と「聖者」について確認しておきたい。「祈願」は聖者が埋葬された廟という宗教施設やその他の場で日常的に行われる宗教的行為であり、日常的な事柄に関する願掛けを指す。「聖者」は「祈願の効力があると信じられている人」、つまり人々が祈願を行う対

象であり、アッラーによる祈願の応答を仲介し実現を補助する者のことを指す。祈願と聖者いずれも、イスラームの正当な信仰（後述の P 的イスラーム）に当たるものではなく、民間信仰的なものとして一般に捉えられるものである。

序章で理論的視座が提示されているが、特に本書の内容と深く関連づけられるのは「民衆イスラーム」という枠組みの相対化、また流動性・可変性に基づいた人々の生活の中から聖者信仰を捉え直すことである。まず「民衆イスラーム」について、大塚和夫が提唱した「知識人イスラーム／民衆イスラーム」という枠組みにおける民衆、つまりイスラーム的知識を有する知識人とそれを受け取る側の民衆を両極に据えた図式における用語である。大塚はジャックス・ヴァールデンプルクが措定した「公式イスラーム／民衆イスラーム」およびヴァールデンプルク本人がこれを修正した「規範的イスラーム／民衆イスラーム」を批判的に再考し、ヴァールデンプルクのような二項対立的な図式ではなく、知識人と民衆を「両極」とした知識の寡多による漸化的な捉え方ができるという発想である。

知識人と民衆を対概念ではなく、様々なレベルで知識を保有する中間的存在を認めることを可能にした大塚の議論に対する著者の批判点は、①民間教育等で得られる知識ではなくエリートの持つ知識に傾斜していること、②知識の多様性、つまり知識人からの行動での伝承や教育により伝えられる知識など、その多様性が等閑に付されていること、③民衆という枠組みが、イスラーム的知識を保有する知識人の残余として扱われてきたことにある。このような批判点に加え、著者は大塚による「P 的イスラーム」「C 的イスラーム」という分析を再考する。これが第 2 章のタイトルにもある「境界的思考」に繋がるのであるが、アーネスト・ゲルナーの議論を下敷きとした大塚のこの区分を噛み砕いて表現するならば、前者が前近代的で聖者信仰を批判・否定する厳格なイスラーム、後者が聖者信仰や精霊に特徴付けられる近代的なイスラーム、ということができよう。これをさらに著者は敷衍し、前者を志向する考え方を「P 的思考」、後者を志向する考え方を「C 的思考」とした。著者のいう境界的思考とは、P 的思考は社会内部を分割して捉えようとする西洋的なものであり、これが C 的思考を他者化する、つまり聖者信仰等を批判的な価値を付与されたカテゴリーに分類し、バウンダリーを設けるような思考であるといえる。いずれも聖者信仰を本質化しており、この境界的思考の問題点として提起されるのが、著者の言葉を借りれば「P 的思考」と「C 的思考」の間における人々の生活の「ゆらぎ」、つまり中間的な立場を後景に退けていること、また人々の生活の中に存在する聖者信仰を問うて来なかったことである。

こうして著者は生活の中の聖者信仰に目を向けようとするのだが、特に廟参詣という宗教的行為に着目する。廟参詣を分析するにあたり参照されるのが、堀内正樹により論じられた礼拝が行われるモスクではないが祈願という行為が行われる場である廟を人の家と捉える、本書で便宜上「廟＝人家」論と称される理論であり、廟はイスラームの「聖者」が埋葬され、この聖者を家の主人、参詣する者を客と捉える見解である。著者はこれについてベルベル社会で日常的に行われる饗応、共食、祈願という廟参詣と関連付けられる一連の慣習・実践との類比から捉えようと試みるのである。この点については第 6 章で論じられる。

最終的に聖者という概念を再定義するため、異同を含む大塚と東長靖による聖者の定義から筆者はその定義の構成要件を抽出する。それは①「理想的人格」の体现、②神による「祝福」の授与、③その証左としての「奇蹟」、および④人々への「恩恵」の授与である。これらの要件と、祈願が必ずしも達成されないこと、存命中のフキーという知識人への所作と廟参詣での聖者への所作の類似、存命の者か逝去した者かという区分が成り立たないことを勘案し、著者は聖者の定義を「祈願の効力があると信じられている人」とする。この最小限の定義により、聖者と一般人を差異あるものとしてではなく、連続性の上にある存在として捉えようとするのである。この定義に基づき、第5章以降における議論が行われる。

各章ごとのテーマに加え、全体に通底するキーワードとなるのは都市との対比における故郷と人的ネットワークであろう。例えば第4章ではシュルーフでの商業における人的ネットワークが論じられ、他方、第6章では聖者祭と廟参詣の様子が描かれている。一見して異なるテーマに沿って述べられた双方の章に共通するのは、故郷と人的ネットワークである。

第4章で論じられるのはシュルーフにおける商業、特に都市での小売業という出稼ぎの一形態であるが、ここでの商業は人的ネットワークが重要な役割を果たす。それは従業員の雇用(当該人物の人柄や能力など)や卸業者、近隣店舗との関係までを含めたものであり、さらには商業上の関係を持つ人々に加え、親族をも巻き込んだ人的ネットワークである。そうして故郷から都市へと出稼ぎに向かう場合には親族の伝手つまり人的ネットワークを頼りにする場合もあり、都市での商業活動で得られた利益は新たな家屋の建築などにより故郷に還元される。そのみならず、身内の出稼ぎに協力するなどの徳ともいえるべき行いを行うことで、その者は故郷の人々から評価される(上記聖者の構成要件④)。また、第6章では聖者が埋葬された廟、そしてそこで行われる「聖者祭」への参詣の様子が描かれているが、村から聖者祭に出向き、村に帰るという一連の流れにおいて鍵となるのが故郷と人的ネットワークだろう。聖者祭への参加に際しては、祈願を行う前に退散することが「失礼」であるとされ、どの村の者が失礼に当たる行為をしたのかが周知されてしまう。

第4章のように、人的ネットワークが商業活動(出稼ぎをする身内の受け入れや商業上の関係構築、利益の計上)のために機能する場合もあれば、第6章のように「失礼」に当たる振る舞いにより悪評が立つ場合もある。当該地域の人的ネットワークは、使い方により良くも悪くも機能するのである。さらに故郷とは、上述のように出稼ぎによる蓄財や自分以外の者を支援した者に対して評価を授ける場であり、出稼ぎする者にとっては安寧の場である。また第6章の内容に沿えば聖者祭の報告がなされた後に村の人々にとって聖者祭のイメージが想起される場、つまり聖者信仰の末端に位置する場であり、同時に既に記したように祈願をせずに退散することでどの村の出身者であるかなどの情報が割れ、近隣住民との関係を乱す可能性を孕むといえよう。

上記の第4章と第6章は人的ネットワークと故郷というこれら二つの存在が際立つ例であり、ポジティブに作用する場合もあれば、ネガティブに作用する可能性をも含んだもの

であることがうかがえる。その他にも第3章で述べられるように出稼ぎのため都市に赴いた人々がその地で故郷の話題に興じ、第7章にて儀礼的治療を行うフキーが人的ネットワークを介して招かれるなど、本書全体を通してこれら二つの存在が随所に現れていることから、人的ネットワークと故郷はシュルーフにおけるベルベル人を捉える上で看過できない点である。故郷とはまた、人的ネットワークの積み重なりにより構成されるものであるかのような印象を受ける。

主に前半で論じられる商業活動と、後半で論じられる信仰と宗教的实践という、一見して別々の問題群であるかのように思われる双方が互いに関連しあっているというのも興味深い。例えば第6章でも論じられるように、廟参詣、聖者祭などは（聖者信仰がイスラームの正当な信仰の一形態であるか否かは別として）大勢の人々が参加する宗教实践、儀礼であるといえるだろうが、その実態、参加者の意見としては廟に参詣したり聖者祭に参加したりすることよりも、その場で行われるスーク（市場）の存在によるところが大きいという。著者が、スークを単なる商業的な機会ではなく人々が邂逅するための場であるという見解を持つように、スークで商業活動を行うためには聖者廟の存在が不可欠であり、聖者廟への参詣を行うにはスークの存在が不可欠であるというように、双方は相補的な関係にあるといえよう。

これを単に廟参詣という宗教实践が世俗化した結果であると捉えるのは早計だろう。なぜなら廟参詣は宗教的現象であり、商業的交換の場であり、人々が出会い情報を交換する場、つまり著者が序章で述べた人・モノ・情報が行き交う場であり、離合集散と流動性を特徴とする、本文中の堀内の言葉を用いるならば「バザール型社会」であるといえよう。こうした状況はシュルーフに限らず日本でも見られる。私が調査してきた京都の祇園祭においても、信仰心からというよりもむしろ祇園祭に際して賑わいを見せる出店や物見遊山の山鉦の拝観が一義的な参加理由という人々が大半である。信仰ではなく出店や物見遊山を主たる目的とした人々によって祭りは支えられている一方、出店などは山鉦、祭にその活動を担保されている。今日の宗教实践は、実際のところ資本主義との関わりを除いては考え難い問題である。論旨からはやや外れるが、このような問題はタラル・アサドが論じた世俗化に関する議論[アサド 2006]からも切り取ることができたかもしれない。

ここからは、著者への評価点と疑問点を述べていきたい。まず、評価すべきは著者のフィールドに関する理解の深さである。シュルーフにてフィールドワークを行い、本書を執筆する上で著者のアラビア語モロッコ方言ならびにタシュリヒート語の十分な理解に裏付けられていることが、本文中で参照される長大な人名録『密の書』をはじめとする文書の分析、タシュリヒート語の語源の意味分析などからもうかがえる。その成果として描かれた民族誌的記述により、シュルーフにおけるベルベルの人々の様子が伝えられる。

また一部の読者には、本書は人類学の研究成果たる民族誌としてある種の違和感が感じられることがあるかもしれない。というのも、本書の事例は主にハーッジという男性とその家族に注目しているものの、ハーッジ自身が登場する回数は多くない。加えて、本文で



述べられるような事象がハーッジの周囲やその村にのみ当てはまるのか、もしくはより広範な当該地域一般に当てはまることなのかが、一般論的な視点から描かれたものであるがゆえに曖昧になっている。近年の民族誌に、語りの分析や悉皆調査を含めた統計的調査が多く見られることは確かである。ここでの疑問は、そうした調査、分析よりも一般論的な視点から描写されている場面が多いゆえに当該地域において同様の事象が起こっているのかという事実関係に関するものではない。むしろその中でもハーッジという特異な対象に比重が置かれているのではないだろうか、という旨である。しかし、こうしたある種の違和感は本書において、可変性と流動性を特徴とするベルベル社会を描き出すために一役買っているのだろう。一般論的な視点から広く当該社会の動きを描くことが、本書のタイトルでもある〈移動社会〉にあるベルベル社会を捉える上で有効な手段だったのだろうと考える。

より一層の議論を行うための疑問点として、データの収集時期の問題がある。つまり、本書で散見される語りの場面や情景描写などが如何なるタイミングで収集されたのか、またインフォーマントが伝えた過去の回想がいつ頃の出来事であったのかという具体的な時間に関するデータが必ずしも全て明確には付随していないということである。本書が大きく依拠される大塚の「民衆イスラーム」という概念が立論された背景にはその当時の時代背景、社会的文脈があったと著者は繰り返し指摘している。そうした背景を持つ「民衆イスラーム」を、ひいてはベルベル社会あるいはイスラーム全体を捉えてゆくために、2001年の同時多発テロやその後のアラブの春と呼ばれる一連の動き、さらには近年のイスラム国（IS）の動きを経て、世界規模でイスラムを取り巻く状況が変化してゆく中で、どのような時代背景を前提とするのかによってイスラム以外の世界との接合の仕方、イスラム世界の相対的な在り方を考える一助となり得たのではないだろうか。

さらに調査時期という点に関連して、当該地域の現状という観点から、さらなる調査の可能性について付言したい。本書の執筆のためのフィールドワークが行われたのが1998年から2006年までの期間であり、本書第3章においても言及されているように、この間にモロッコ全域で携帯電話が急速に普及し、故郷と言われる地域においてもそれが大きく影響したという。ここで述べられたような急速な情報化に加え、本書出版時点の2018年と調査年の間にも著しい情報化、技術発展が起こったことはいうまでもないだろう。私が2018年にモロッコを訪れた際には、多くの人々がスマートフォンを所有し、チャットやボイスメッセージなど通信技術を駆使してコミュニケーションをとっていた。近年の情報化社会の進展により、故郷と都市とのつながり方もより多様化、高速化したことであろう。こうした近代的な技術が導入された現在（もしくは近未来）、シュルーフの人々の生活は、故郷とのつながり方はどのように変化してゆくのかに、さらなる人類学的な研究の可能性を期待できる。

以上、本書はシュルーフという地域におけるベルベル人の生活を、特に商業活動、聖者信仰、人的ネットワークという視点から描いたものである。国内のイスラーム研究を中心とした学術誌を下敷きとした序論を含め、イスラーム研究、北アフリカ地域研究の入り口としても位置付けることのできる一冊である。

書評 『〈移動社会〉のなかのイスラーム——モロッコのベルベル系商業民の生活と信仰をめぐる人類学』

<参考文献>

アサド、タラル 2006 (2003) 『世俗の形成——キリスト教、イスラム、近代』 中村圭志  
訳、みすず書房。